

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 0 年 3 月 発 行

左翼の病理について

松 崎 昇

左翼の病理について

松 崎 昇

はじめに

- I 共産主義の実態
- II 左翼が指向するもの
- III 共産主義イデオロギーという狂気
- IV 東洋発新代とは何か

おわりに

主な参考文献・サイト一覧

はじめに

左翼右翼区分は、18世紀末のフランスにおいて、国民議会議場内で、民主派急進派と王党派穏健派が、議長席から見て左右に分かれていたことに由来するという。以来、専ら左翼が、人類史をめちやくちゃに引つ掻き回してきている。

すなわち1789年9月11日から始まった国民議会（制憲議会）で、国王の拒否権および貴族院の存続を認めるか否かをめぐって議論が紛糾した。以降、94年7月27日の（テルミドールの）クーデターまでの5年間、左翼が刻々と急進化するなか、混乱が著しくなり、多くの血が流れる結果となった。フランスでは続く19世紀を通して政変が繰り返された。

20世紀前期のロシアでは、これに輪をかけた大混乱が生じた。全権を奪った革命派が長期にわたって恐怖政治を敷いたからである。同世紀中葉前後には支那でも大混乱が生じた。幸いにしてソ連体制は1991年をもって崩壊したが、支那ではなお共産党独裁政権が反日を国是としてしぶとく生き延びており、国

内外に絶大なく〈共禍〉を及ぼし続けている。

では、とりあえず左翼独裁政権による支配を被ったことのないわが国民には、それら〈共禍〉は基本的に無関係なことであっただろうか。そんなことはない。確かに大量殺戮こそ経験しないで済んでいるが、わが国も国内外の左翼による災厄を、戦前戦後を通じて、そして現在も、ひどく受けてきている。

問題は左翼にある。左翼はなべて極度の謀略暴虐性をもつ。この極度の謀略暴虐性は、一体どこから由来するのだろうか。とりあえずレーニン・スターリン・毛沢東といった諸個人の恐るべき個性（個別性）にもよろうが、もちろんそれだけではない。ロシアや支那という恐るべき地歴民族的特性（特殊性）にもよろうが、それらだけでもない。最大のポイントは、共産主義イデオロギーがもつ論理的必然性（普遍性）によるのである。

すなわち問題は共産主義イデオロギーにこそある。それは、露支のみならず世界中で、労働者貧農のみならず若きインテリの多くを、虜にした。と言うよりもむしろ、米英等の若きインテリですら滔々と赤くかぶれてしまったところにこそ、真の問題が潜んでいる。一体なぜそんなことになってしまったのだろうか。

しかも問題は、過去形ではない。左翼イデオロギーは、姿かたちをさまざまに変化させながら現在に至り、現在もなお猛威を振るっている。さきにもふれたように、既にソ連という〈共産主義の母国〉が崩壊したにもかかわらず、なぜ左翼かぶれが世界中で現在も跳梁跋扈し続けるのだろうか。右翼たる保守派による批判をもってしても、なおなかなか中和・退治できないのはなぜだろうか！

本稿では、左翼の指向性がなぜしぶとく生き残り続けるのか、その論理的不可避性を考察したい。

叙述展開としては、何よりもまず共産主義の実態すなわち〈共禍〉を略観することから始めなければならないだろう。ついで左翼が指向するものを略把しておきたい。そして共産主義イデオロギーという狂気を考察する。これが本稿のメインとなるであろう。最後に、これを根本的に乗り越えるものとして東洋

発新代論をごく簡単に示唆しておきたい²⁾

注

1) 世には、ソ支等の共産主義は真の共産主義ではない、といった議論もあるであろう。いわく、あれらは虚偽の形態であった、共産主義の形態は多様である、真の共産主義は未だ実現されていない、等々である。しかし本稿ではそのような世迷言は取り上げない。

また本稿では共産主義と左翼（さらには社会主義やマルクス主義等々）を概ね同義語として扱う。実際には、バブーフらを筆頭として、無政府主義等も含め、小局的には限りない諸差異があるが、大局的にみれば大同小異であると言うほかない。

ちなみに、無政府主義を説く人々のなかには、穏やかな人物もいるようである。だが、真に恐ろしいのはこの無政府主義である。なぜならば、無政府・無秩序状態は、若く極度に狂暴な、ごくごく一部の男どもにとってのみ happy であろうが、女性乳幼小児老人病傷者普通者等々、99%以上の人々にとっては禍々しい恐怖以外の何ものでもないからである。これは、おそらくは歴史を通じてあまりに狂暴な国家権力をもつことしかできなかったロシア等西洋系の知性の一部が対極的に描かざるを得なかった哀しい幻想の共同体なのだろうが、論理的に捉え直す限り、まともな精神をはぐくむことができなかつたやくざごろつき以下の極めて獐猛凶暴な者どもの（ための）思想でしかない。無政府社会よりは断然、独裁社会の方がましである。独裁者に屈従している限り独裁社会なりの秩序が存在するからであり、秩序こそはともかくにも世の99%以上の人々の生命・生活を守る中心軸であるからである。そして独裁社会よりも王政・貴族政・民主政等々の方がなおましである、といった順序になるのであろう。

2) 私事にわたり恐縮であるが、私自身かつてはささやかな左翼の徒であった。したがって本稿は、かつての自己の総括という意味ももつであろうことを注記しておきたい。また私は既に左翼系の文献をほとんどすべて手放してしまったので、参照引用等もほとんどできなかった、併せて御海容を願う次第である。

I 共産主義の実態

左翼による大暴乱は〈フランス革命・ロシア革命・支那革命〉等として典型的に表出された。その〈共禍〉の実態を垣間みることから行論を始めてみよう。

1. 驚愕すべき殺死数

フランス革命ではおよそ60万人（対外戦を含めればおよそ200~250万人）

が殺され、または死んでいった。

だがもっと恐ろしいのは革命ロシア・革命支那である。すなわちロシア（ソ連）では、1920～30年代を中心に、おおよそ5,000～6,000万人が殺され、または死んでいった。さらに支那でも、50～60年代を中心に、おおよそ7,000～8,000万人が殺され、または死んでいった。両者を通じて最も多いのは餓死であるが、これも共産主義による殺害の一形態にはかならない。また彼らは自民族すら何のためらいもなく大量殺戮していったのであるからして、領内の諸々の少数民族がどのような扱われ方をしたか、想像に余りあるであろう。

こうして共産主義は、ソ支を中心として、1億人をはるかに上回る人々を死に至らしめた。誠に恐ろしいことである。ちなみに20世紀はよく「戦争と革命の世紀」と呼ばれるが、二度の戦争による死者数は、おおよそ、第一次で1,900万人（ただしこれにはインフルエンザの影響も大きい）、第二次で5,500万人と言われる。革命の方が、人を、桁違いに多く殺している。20世紀は、実に「革命と戦争の世紀」だったのである¹⁾

2. 戦前戦中期ソ連の暗躍

革命ロシア（ソ連）は、自国内で謀略殺戮の限りを尽くすだけでなく、コミンテルン等を通じて早くから全世界に向け謀略諜報活動を積極的に繰り広げていた。とともに、全世界のインテリの少なからぬ部分は、多かれ少なかれ共産主義イデオロギーにかぶれた。わけてもそのうちの若き積極的な分子は、自らエージェント化し、またはエージェントとして取り込まれていった。

このうち、特に問題なのは、（当時）世界を主導する力をもっていたアングロサクソン勢である。〈自由〉の国を自認するアメリカ、〈保守〉的な国と他認されるイギリス、この両国こそは、一見、共産主義と最も程遠いように思われる。だが、何を隠そう、この両国においてすら、相当数の共産主義者が叢生してしまったのである。

わけても最大の問題国が、超大国アメリカである。アメリカ国内には、少な

くとも 300 人以上のエージェントがいたことがわかっている。たとえばマンハッタン計画（原爆作成の秘密計画）の内実をソ連に密告し 1949 年のソ連原爆保有を可能にしたローゼンバーグ夫妻は「著名」なエージェントであった。もちろん同計画に関して、ほかに幾つものルートがあった。だがそれだけでなく、実に F. ルーズベルト政権内にも多くのエージェントが潜り込み、ソ連のために八面六臂の暗躍をした。ハルノート（強硬案）を作成し、日本を最終的に対米戦へ決起せざるをえなくなるよう仕向けた財務次官補 H. ホワイトは、彼らのうちの出世頭であった。ほかにも大物として、國務長官上席補佐官 A. ヒス、大統領特別顧問 L. カリーらがいる²⁾

そしてその外側には、エージェントを支えるフラクないし限りなく左翼的なシンパが沢山いた。彼らは、左翼的な活動を積極果敢に繰り広げた。たとえば F. ルーズベルト政権における New Dealer には 200 人以上のマルクス主義者がいた。そして彼らこそが、その後、被占領下の日本に大挙してやってきて、民政局を拠点とし、左翼顔負けの占領軍政を徹底的に推し進めたのであった。すなわち占領期に、日本の伝統・制度・文化等々を徹底的に破壊した。戦後日本が左傾化したのは、専ら彼らのせいであった。

さらにその外側には、一般に親ソ容共のリベラル派が膨大にいた。彼らこそが民主党系の多数派として、政界・マスコミ界・学界等々で、議論・世論をリードしたのである。

イギリスでも、たとえばケンブリッジが赤く染まってしまった。MI6（軍情報機関）高官 K. フィルビーを筆頭とするケンブリッジ・スパイ・リンクなどが「有名」である。たとえば諜報機関中枢が敵スパイに潜入されてしまったらどうにもならない。友好国（同盟国）アメリカから提供された機密情報群が逐一ソ連（コミンテルン）に筒抜けになってしまった次第である³⁾

また左翼活動こそが、直接間接に、戦争をもたらした面があることも見落とすわけにはいかない。少なくとも第二次世界大戦に関して、欧州面の能動因たるファシズム・ナチズムはソ連ボルシェヴィズム・スターリニズムの落とし子

であるし、東亜面の焦点たる支日においては日本を戦争に巻き込むべくソ米支日欧等の共産主義者（およびそのシンパ）どもがあざとく暗躍した。少なくとも日本が大東亜戦争に突き進まざるをえなくなったのは、専ら共産主義と容共反日のアメリカとのせいであった⁴⁾

3. 戦後ソ連等の暗躍

冷戦構造は1917年から始まっていたが、日本以外、これに気付く国はなかった。第二次大戦後の47～48年頃から、ようやく、米ソは公然たる冷戦体制に入った⁵⁾

これは、核軍事対立を根底にもちつつも、専らイデオロギー上の戦いであった。具体的にはKGB等対CIA等の阿漕熾烈な謀略・諜報戦であった。軍配は前者に上げるほかない。すなわちソ連はイデオロギー・謀略諜報戦でほぼ完勝した。やはり攻勢と守勢の差であろう。また自由主義・民主主義の国アメリカでは、秘密諜報組織であっても、なかなか秘密を守りきれないし、各種の制約を免れない。その点、圧政の国ソ連では、トップの信認さえ得ていれば、全くのフリーハンドで活動できる。ただ経済面で、体制を支え切れなくなってしまう、91年のソ連崩壊に至った次第である⁶⁾

もっとも91年後も、共産主義体制は支那等で残っており、なお危険である。特に支那は現在、東亜・西太平洋から全世界の覇権を狙い、極度の軍拡・領土領海膨張に努めるとともに、世界中で最も悪辣な工作を繰り返しており、特にわれわれ日本人は一瞬たりとも決して気を緩めることができない。

注

- 1) 革命にせよ戦争にせよ、正確な死者数は、もちろんわからない。特に革命に関しては、当該国は当然極端に少なく見積もるうえ反省的検証など何ら行わないから、ますますわからない。たとえばS.クルトワは、ロシアで2,000万人、支那で6,500万人と推定している[Courtois, S., et al., 邦訳12頁]。しかしたとえばロシアで、強制収容所でむなしく死んでいった人数など入っているのだろうか、大いに疑問である。A. ソルジェニーツィンは『収

容所群島』で6,600万人という数字を挙げていたし、[Rummel, R.]は6,200万人という数字を挙げている (Table 1.2.)。1997年11月6日のモスクワ放送でも、この6,200万人という数字を挙げていているという。また「ワシントン・ポスト」1994年7月17-18日号記事(‘Mass Death in Mao’s China’)は、支那における死者数を8,000万人と伝えている。ソ支に関しては、本文で記した数値あたりが、順当な推計値であろう。

もっとも、支那史上では、もともと1,000万人単位の死者がざらであった。すなわち前王朝の都城が落ちれば100万人単位、戦乱・旱魃・洪水等により餓死が広まれば領域全体で1,000万人単位で人が死ぬお国柄であり、紀元前から近年に至るまで食人が文化にビルトインされているとともに、後漢末三国期や明末清初期という王朝交代期にはそれぞれ4,000~5,000万人が死んでいるお国柄である。とりわけ19世紀の太平天国の乱期には、回教徒の乱なども含め、1億6,000万人余が死んだという。驚愕の一言である[杉山徹宗, 59, 61頁]。これらのうちに並べれば、共産主義による死者数も、どうということはない、毎度お馴染みの一光景ではある。何たる殺戮の風土史であることか。換言すれば、共産主義の爪痕は、人類史上初というマイナス意義があることに加え、人口比で言っても、ロシアの方がより深刻重大である。(人口比で敷衍するならば、カンボジアの方が更に悲惨であるが、これは三番煎じ以降の悲喜劇であるにすぎない。)

- 2) 1910年代以降、アメリカ国内でも共産主義エージェントは暗躍している。彼らはモスクワからの秘密指令を受け各種工作に従事していた。これに対し、アメリカ諜報機関は1940年代頃から諸エージェントとモスクワとのあいだの暗号交信を傍受解読し始めた。このうち、概して、両者間の1940年代の交信記録を、国家安全保障局(NSA:軍情報機関:1952年~:エシュロンを主宰)等が、1940~70年代に解読したプロジェクトのことを、ヴェノナ・プロジェクトと言う。同文書は、対ソ諜報戦の都合上、長らく非公開であったが、ソ連崩壊に伴って、1995年から公開され始めた。(またロシアでも、旧体制下の諜報活動の一端が公開され始めた。)これらによって、本文中の人物等がコミンテルン・エージェントであることが(改めて)立証された。これについては、NSAのサイトのほか、たとえば[福井義高]を参照されたい。
- 3) わが国も尾崎秀実や西園寺公一らによって政権中枢ないしその直近まで汚染されていたのは、周知のところであろう。
- 4) のみならず、たとえば[若狭和朋]によれば、第一次世界大戦の導火線となったオーストリア皇太子夫妻射殺事件、この犯人たるセルビア人達も共産主義者であり、セルビア革命政府・ロシア革命派と気脈を通じつつ、世界大戦を引き起こすべく行動した、という。共産主義者の工作が第一次世界大戦を成功裡に惹起したわけである。

なお、同書は、1917年のロシア革命、20~30年代にかけてのワイマールドイツ(およびその反動としてのその後のナチスドイツ)、30~40年代にかけてのF. ルーズベルト政権等、1910~40年代頃の国際政治情勢にユダヤ勢力の活動が大いに反映されていることも指摘している、併せて参照されたい。

また日本の軍部等にも国家社会主義者が多くみられたが、これも社会主義（共産主義）の一亜種である。要するに、政界・軍部・言論界等々に、左翼（両翼）かぶれがうじゃうじゃいたわけである。

5) ソ連は、日露戦争敗北への復讐の念に燃え、日本の皇統（彼らのいわゆる天皇制度）を打倒することを最優先の対外攻撃目標とした。かつ、対欧・対西南アジア方面への革命輸出がうまくいかなかったので、対東亜方面たる支那での騒乱を最大の世界戦略目標とした。そしてその際の最大の攻略対象がほかならぬ日本であった。国際共産主義によるこの二重の攻撃に対して、わが国は、孤立無援の闘いをせざるをえなかった。わが国こそは戦前から冷戦を闘っていたのである。ではなぜ孤立無援であったのかと言えば、アメリカを筆頭として、世界は、日本を除き、国際共産主義の恐ろしさがわからず、知ろうともしなかったからである。そしてわが国の代表的な防御策が、1925年の治安維持法であったが、わが国の闘い方・防備は大分手ぬるく、お粗末であった。注3、4でふれたような事態を自ら招いてしまったし、各種の国際諜略諜報戦に完敗しているからである。（それとて、戦後の無為無策よりはましであるが。）

これに対して、たとえばドイツなど、既に帝政でないとはいえ、ラッパロ条約秘密軍事協約でソ連と密接に提携していたし、アメリカにしても能天気にもソ連に親近感をもっていたわけである。

6) ちなみに革命ロシア・ソ連の政治警察・諜報諜略諜殺機関は、概ね、チェーカー（17～22年：反革命・テロ・サボタージュ取締り全露非常委員会）→GPU（22～23年：国家保安部）→OGPU（23～34年：合同国家保安部）→NKVD（34～45年：内務人民委員部）など→MVD（46～60, 68～91年：内務省）など→KGB（54～91年：国家保安委員会）など、という変遷を辿ってきている。彼らの諜殺技術は世界最悪（最高）であって、レーニン・スターリンも薬殺されている。アメリカの場合は、OSS（42～45年：戦略サービス局）→CIA（47年～：中央諜報局）など、である。

支那も、60年代のインドネシア等で諜略活動を行ったが、失敗した。

なお70年代には、デタントならびにカーター政権の弱腰に付け込んで、ソ連は世界各地に左翼政権を打ち立てるなどしたが、80年代に入ってレーガン政権が態勢を建て直すことに成功した。

II 左翼が指向するもの

初めにふれたように、左翼は穏健派に対する急進派として、いわば民主化を求めるかたちで、スタートした。ではその後、一般に左翼は何を目指してきたのであろうか。右翼と対比しながら、以下、簡単にみてみよう¹⁾。

1. 左翼とは何か

左翼は概ね、進歩派革新派を自称し、平等・自由、なかんづく平等を獲得目標とする。そしてそのために旧来の諸制度を変革しようとする。これは時間軸の切断を意味する。過激な場合には、全面的な変革を希求することにもなる。これが、手段としての革命である。

これを理論的にみるならば、左翼とは近代化という方向性を先取りに推進する勢力であるということになる。すなわち左翼は近代化の先端を進む者、前衛勢力である。これは近代化が進む御時世にあつては主流派であるとみなすほかない。あるいは少なくとも論理的正統性・能動的普遍性をもつ。

これに対して右翼は概ね、保守派を自称し、王統・宗教・民族等に象徴されるような伝統的な体制をできるだけ保持することを目標とする。これは時間軸の継続を意味する。(ちなみに、右翼が左翼と過激に入り混じった場合には、現在の体制を打倒し過去の体制の復古を狙うことにもなる。)

これを理論的にみるならば、右翼とは近代化の奔流を少しでも押し留めようとする勢力であるということになる。すなわち右翼は近代化に抗う者、抵抗勢力である。これでは、近代化が進む御時世にあつては、所詮多数派にはなれないし、勝ち目もない。右翼には抗近代・反左翼という受動的特殊的な規定性しかない。

以上を要するに、左翼が近代化を率先して切り開くという積極的規定性を体現しているのに対して、右翼は近代化の流れに抵抗するという消極的規定性を有するにすぎない。近代化に関して、左翼と右翼はいわばアクセルとブレーキの関係にあるのである。この両者においては、アクセルの方が本来の意味をもつ。車は走るためにあるのであって、止まり続けるためにあるわけではない。ブレーキを踏んだままでは、パーキングに入れたままでは、車は用を為さない。近代が続く限り、左翼の方に主導権があるのである。

さて、問題は左翼である。左翼は反体制時（権力奪取前）と体制時（権力奪取後）とでは、あり方が根本的に異なる。言うところでは大違い、人類史上、

これほど劇的な対極的差異を示した事例は他には決してない。詐欺師真っ青の、対蹠的二重基準である。すなわち権力奪取前には、誠に無責任にも、現体制への批判非難ばかりをする。大衆に理想を説き、利益を約束し、変革・革命への決起を訴えればいいのだから、こんな楽なことはない。しかし権力奪取後は、一転して、自分達の体制への批判を決して、決して許さない。この共産党独裁支配による弾圧は実に苛烈であって、異論を完封するだけでなく、異論可能性をも徹底的に排除する。虐殺等により死体の山を築くことも、何ら厭わない。自由・平等・友愛など、金輪際ありえない。すなわち自由も人権も民主も人民もへったくれもあつたものではないし、社会内は一握りの圧倒的全面的特権階級（党幹部）と圧倒的な貧しさ（の平等）があるが、これはもちろん激烈な不平等と呼ばなければならない³⁾

さて、では権力奪取前と権力奪取後、どちらが左翼の真の姿だろうか。それはもちろん権力奪取後の方である。ただ、理論的には、権力奪取前の左翼にこそ、注目し続けなければならない。それはなぜか。権力奪取後の左翼の姿を批判するのは、いとも簡単である。おどろおどろしい現実を指摘すれば、それでよい。いくら何でも、ソ支等の現実を正視するならば、万人が引くほかない。だが問題は、権力奪取前の左翼の姿にこそある。これこそを、根本的に叩いておかなければならないからである。

2. 旧来の左翼

左翼も、具体的には、国柄民族柄による差のほか、時代相によってもあり方はさまざまに異なってきた。ごくかいつまんでみておこう。

19世紀的な経済重視型の左翼は、〈恐慌から革命へ〉というスローガンに象徴されるように、貧困・階級格差に不満を唱え、生産手段の国有化を目指し、労働者階級の国際的な組織化を図った。

だがその後、先進・後続諸国では経済成長とともに労働者階級の富裕化が生じたこともあり、体制変革の主張は受け入れられないことが分かってきた。そ

こでそれら諸国では体制内の漸進的改革が、主流派の運動様式として普及することになった。この修正派に対し、教条派は激しい批判非難を繰り返し、急進派は直接闘争を訴えるなどした。他方後発諸国になればなるほど、そもそも労働者が全国的にはあまりいないので、貧農や少数民族に訴えたり、前衛党先導による暴力闘争を強調したりした。少数派ゆえ平時には期待できないので、折からの機運に乗じ「戦争から内乱を経て革命へ」という荒っぽいスローガンを訴えることにもなった。

そして周知のように、第一次世界大戦末期の1917年、戦乱最中のロシアで、騒乱・政権空白状態の機を捉え、ボルシェヴィキ（と僭称した党内少数派）が武力により国家権力を奪取してしまった。彼らに、のちのヴィジョンなどあろう筈もない。ただ全権を党指導部が独占し振るい続けるべく汲々とし、異論者・不服従集団等を徹底的に抑え込んだ。22年にソ連体制・同時期にスターリン体制が確立、30年頃からは農業集団化・軍事的重工業化が強権的に進められた。しかしこの点を含め、共産党は、国家を経由して、あるいは国家などないがしろにしたまま、ともかく圧倒的な暴力を行使することになる。剥き出しの弾圧、虐殺…、人知の限りを尽くした暴虐のオンパレードである。諸個人の人権、少数民族の自治権など、あろう筈もない。

さて、ソ連等成立後、世界の左翼は、ソ連（コミンテルン）等の指示に盲従するか、それとも多かれ少なかれ距離をとり自主的に運動するか、方針が大きく別れることになる。（ただし支那は独自にソ連的な道を歩み始めた。）このうち正統派を自称する前者は、ソ連に振り回されつつ、やみくもに盲従活動を繰り返り広げることになった。これに対して傍流派たる後者の場合基本的には、直接武力闘争を唱えず、概ね社会民主主義・社会改良主義的な路線を採り、福祉等を訴え、体制内での自利益・勢力拡大を図ることになった。ドイツ社会民主党は、すでに1912年に国会第一党となっていたが、19年以降政権政党となった。ほかにも多くのヨーロッパ諸国で、左翼政党が政権を主担するなどした。スウェーデン社会民主労働党（17年以降）、イギリス労働党（24年以降）、フ

ランス社会党（36年以降）等々である。そしてソ連の言いなりになるにせよ相対的に距離をとるにせよ、親共容共等のリベラル系勢力が彼らの周りを十重二十重に固めた⁴⁾。

そして左翼の必死の謀略活動により、第二次世界大戦を前後して、左翼陣営（いわゆる東側諸国）は増えてしまった。実に第二次大戦の最大の戦争利得者は、ソ支（共産党）であった。

3. 1960年代以降の左翼

さて、共産主義による統制は万年戦時体制のようなものであるから、戦時・非常時には馬力を発揮した面もあるが、戦後・平時になると当然にも失速した。対照的に、およそ60年代以降、経済成長を基調的背景として、社会・生活上の諸局面において、東側諸国に対する西側諸国の総合的優位が最終的に明らかとなった。これに伴い、西側・先進諸国の左翼は、過激な直接闘争を最終的に断念し、体制内で自己の主張を通し自己の勢力を拡大することを旨とするようになった。これにより「大きな政府」が不可避となった。具体的にはヨーロッパ諸国等で、戦前にもまして、社会民主主義系の左翼政党が度々政権を担当するなどしている⁵⁾。

左翼はまた文化思潮面等においても、活発な反権力・反権威・反秩序闘争を展開していた。国家に依存し国家を利用して国家を批判するという、一個二重の無責任・御都合主義戦略を、意識的無意識的に取り始めたわけである。

このような社民・リベラル的な潮流に対し、やはり概ね60年代頃、ベビーブーマーである若い世代を中心に、いわゆる新左翼が世界的に登場した。これは、既成左翼が体制内化して「闘わなくなった」ことに反撥し、直接闘争を繰り広げようという趣旨であった。彼らは、反戦・反人種差別・反男性（ウーマンズ・リヴ）・反権威等々を訴え、ロック・フリーセックス・薬物に浸るなどした。

70年代になると、この動きは過激化するとともに狭隘化した。すなわちイタリア赤い旅団・日本赤軍・ドイツ赤軍などを筆頭として、新左翼過激派は、

誘拐・殺害・ハイジャック・テロ等々を世界的に繰り返した。そのかんには、レバノンにおけるパレスチナ過激派との連携、共産国の支援等もみられた。だがそのような過激な直接闘争が人々の理解を得られるわけがない。彼らの言動は大衆から著しく乖離し、自壊していった。

わが国の場合も大体同様の経過を辿ったが、ただ、わが国の場合には被占領期以降の固有な大問題があることを予め了解しておかなければならない。戦前の流れから簡単にみておこう。

アメリカは1910年代頃以降、わが国を叩き潰すべく、延々と策を練り実行に移してきた。ソ連も20年代以降、同じくわが国を叩き潰すべく、延々と策を練り実行に移してきた。分裂支那は、米ソ英独等と最大限相互利用関係に立ちつつも、主に米ソによる積極的全面的指示を受けるかたちで、わが国に攻撃を仕掛け、わが国を戦争に引き摺り込み決して離さなかった。巨悪小悪どもによるそのような世界的政軍略にしてやられてしまった結果が、大東亜戦争であった。

さて敵軍改め占領軍は、「民主化」という名の日本破壊・弱体化を徹底的に行った。〈白人による世界支配体制〉に「生意気にも」異議を唱えた日本が二度と立ち上がれないよう、日本を精神的体制的に永久に無能・不能化するための再リンチである。「戦後民主主義」とは被占領体制の悪化継続の謂いにほかならない。この日本去勢化作戦は、彼ら自身の想像をはるかに絶するほどに「大成功」を収めてしまった。今日のわが国の実に惨たる社会文化状況をみればそれはあまりに明らかである。

戦後わが国最大の問題、それは核軍事力を中心軸として、軍事的に米軍に制圧されつつ依存していることであり、自立しえていないことである。もちろんこれはソ（支朝）との対抗上やむをえない面もあるが、わが国が核武装すればそれで済むだけのことである。この旧敵軍制圧依存・独立放棄状態は、わが国有史以来初めてのことであって、この対米従属体制ゆえに国家国民としての独自の、正常な思考・活動ができなくなってしまう。当然にして、戦前・

戦争・非占領期の総括もできていない。だから今後の方針も全く立てられない。悲惨の一語である⁶⁾

このような大前提のもと、戦後、わが国は体制自体が左傾化してしまった。また左翼とリンクして、同和・在日朝鮮人組織など、わが国内に反日小独立国のようなアンタッチャブルな諸組織が割拠し、徴税・補助金部分も含め、三権・教育マスコミ両界等々を大きく歪めている⁷⁾

1960年代頃以降のいわゆる新左翼運動は、西洋同様、若者の過激な反社会運動であったが、70年代以降内ゲバ等の隘路に陥った。

4. 1990年代以降の左翼

周知のように、1989年に東欧体制崩壊、90年に東独崩壊・ドイツ統一、91年にソ連崩壊が生じた。とりわけ91年のソ連崩壊は、左翼失墜にとって決定的な出来事であった。以降、左翼は本来の目標を失い、無目的化し、漂流することになる。しかしながら、人間、なかなか思考・行動様式を変えられるものではない。自己と厳しく対峙し、自己批判を通じて自己を否定的統体的にやり直すことは容易ではない。その代わりに、大目標を失ったまま、左翼の主流は、新奇な小目標をさまざまに立てて生き残りを図ったり、さらには単なる破壊混乱非難を性懲りもなく無目的に行ったりすることになった。人権・反性差・反家族・福祉・環境・反核・反原発・反米・反グローバリズム等々をめぐる怪しげな市民・NPO運動や、反規範・反道徳・反常識・反伝統等々を煽る言動である。これを現代左翼（新々左翼、Pinkies）と名づけるならば、この現代左翼の特徴は、〈労働者階級・革命・共産主義〉等の古典的ドグマを声高に叫ぶことなく、社会的弱者・脱落者・不法者等および一般大衆の不平不満を最大限煽り、所与の文化・価値を独善的に非難破壊する点にある。そしてただただ社会文化を混乱させている。いわばアカからピンクへ色彩が弱化したわけであるが、その分普及度は強まってしまった。〈薄く広く〉なったわけである。しかも恐るべきことに、彼ら Pinkies は今や国家社会の要所をも占めている。

だから自らの力を大いに振るい、各種の珍奇なスローガンのもと、社会・文化の混乱を主導し、またそれに拍車をかけている。

「すべてをぶっ壊せ！」という主張自体は、旧来の左翼や60年代以降の新左翼と変わらない。ただ、肉体的暴力をもって国家権力を体制外から政治的に破壊しようとするのではなく、言語的暴力&三権等を通じて現体制を体制内から腐食自壊させようとする点が異なっている。こうして、現在も、先進諸国を筆頭として、世界中で、左翼が蔓延し、事態を席捲している。

また国連人権委員会等、国際機関の一部を左翼が占拠、世界に向け公式に左翼の言辞を撒き散らし、左翼的規制を命ずるという恐ろしいことにもなっている。個々人の人権を守ろうといった主張は、途上国には有効な面があるかもしれないが、先進国には有害無益である。

つぎにわが国の場合、前項で指摘したわが国固有の問題が深まってしまったことを、まず指摘しておかなければならない。すなわち絶対的平和主義等を核とする護憲主義が主流派となり、被占領・戦後体制の悪化再生産による自虐の度が深まってしまった。また連携して、80年代頃より、支朝による根も葉もない反日謀略攻撃が著しく激化している。

一般的に言っても、西洋諸国同様、わが国左翼も、「明快な」目標がなくなった分、庶民の雑多な不平不満を煽り、やみくもな社会文化崩壊・無秩序を目論むことになった。たとえアソシアシオンなどと新たに唱えようと、空疎なことに変わりはない。現在も、(人文社会系の)学界は言うまでもなく、教育・マスコミ両界を筆頭として、政官司財界等々、遍くこのPinkiesに汚染されている。この結果、彼らが現体制の維持強化を図り、これに対して右翼保守派は現体制(戦後体制)からの脱却を訴えるという「逆転」現象すら生じてしまっている⁸⁾。

要するに、国内外の猛烈な自虐反日大攻撃により、わが国家・社会・文化は大混乱に陥ってしまっており、わが国論は千々に分裂、わが民族は氣息奄々、このままでは衰亡の一途である⁹⁾。

注

- 1) なお一般に左右両翼について論じたものとして、たとえば[浅羽通明]を参照されたい。
 2) もっとも保守派自体は「自分達は単なる対立軸ではない、われこそはバランスーであり、クラッチも兼ねている」等と自称するであろう。それを言えば、左翼としても、反論はありうるだろう。しかし大局的には、本文のように整理して良い筈である。したがって、左翼と右翼の間には中道派もあることになる。

ちなみに向坂逸郎はかつて『流れに抗して』という著作をものした。だが、ミクロ的な局面はともかくとし、マクロ的な局面をみる限り、左翼は流れに棹差している（時流の先端で時流を早めようとしている）わけである。

- 3) たとえば革命前のロシア帝政下の秘密警察（オブラーナ）による死者数と、さきにもみた、革命後のそれによる死者数とを比べてみればよい。桁が幾つも違って、比較にもならない。恐るべきは共産主義である。ということは、いわば、共産主義体制に対してこそ、のみ、革命が必要である、ということにもなる。

なお、抑圧・恐怖の体制は、権力奪取前であっても、彼らの組織内では同様にみられるが、内部弾圧等は情報完封によって組織外の大衆には漏れにくいから、一般には問題にされにくい。

- 4) 1920年代もさることながら、30年代、人民戦線戦術と相前後して、西洋等で、インテリの左傾化が多くみられた。ただしその後、モスクワ裁判・スペイン内戦・独ソ不可侵条約・フィンランド侵攻等をめぐって、その都度離脱の波も生じたが、いずれにせよ彼ら左翼（かぶれ）の系譜が、当時、またそれにもまして戦後、思想・理論界等で「大活躍」することになった。

- 5) アメリカでは民主党左派が左翼的勢力を体現している。

ちなみに、アメリカはもともとイデオロギーの国である。しかも近代化が産み落とした国である。合理主義を重んじ、国王・貴族がおらず、個人主義を旨とすることなどからも、この点は理解できよう。だから二重に、親左翼・容共なのである。換言すれば、なぜアメリカは左翼の脅威に無知であるか。それは、アメリカの保守派でさえも近代主義を奉じており、その点で自らと左翼との区別をつけにくいからである。（近代と左翼との同系性はⅢで扱う。）

なお、アメリカにおける左翼の状況等については、たとえば[Buchanan, P.] [Coulter, A.]を参照されたい。

- 6) ここからする喜劇が、平和主義という名の軍事的政治的独立の放棄の誇示である。日本左翼は、有害無益な平和主義を唱える。だが、近隣の危険な諸国が核武装・大軍拡しているなかで、日本ほどの歴史的な大国が核・軍事力の真空地帯を作ってしまうことは、近隣諸国に間違ったシグナルを与えることになる。すなわちこの豊かな地への直接間接の侵略衝動を誘発することになる。そしてこれはもちろん日本民族に破滅的な結果をもたらす。わが国の平和主義を喜ぶのは近隣の敵国どもだけである。と言うよりも、もともと米ソ等

が、平和主義イデオロギー（という日本去勢化策略）をわが国に植え付け育て上げたわけである。軍事は近隣同等諸国とのバランスの問題である。現下の情勢にあっては、わが国も核武装・重武装しなければならない。是非もないことである。

なお現代日本論については[拙著、平成11年]を、軍事政策については[Matsuzaki, N.]を参照されたい。

- 7) ちなみに、同和&在日勢はわが国の左右翼双方の圧倒的多数派を占めている。(加えて在日勢は暴力団の過半をも占めている。) 恐るべき暴力的大勢力である。
- 8) 宗教界においても、キリスト教・浄土真宗等の一部勢力が、左翼に汚染されている。なお創価学会は巨大な独立王国を建設し、長らく連立与党の一員でもあった。アンタッチャブルそのものになってしまったわけである。
- 9) ではどうしたらよいか。と言うよりも、わが民族は今後何をなすべきか。たとえば国内にあっては少なくとも公務員に日本民族・日本国家に対する絶対的忠誠を誓わせるとともに、国外にあっては反日共産党独裁国家である支北を「なめらかに」自壊させるべく全力を挙げて工作すべきである。

Ⅲ 共産主義イデオロギーという狂気

では、左翼的見地はなぜ人々を蠱惑する側面をもっているのだろうか。これが最大の問題である。以下に考えてみよう。

1. 理性主義のこわざ

近代における社会は〈経済・国家・意識〉という三領域からなる。そしてこの三領域の主体はそれぞれ〈資本・主権・理性〉である。すなわち近代的意識の核心には理性がある。経済の主体が資本であり国家の主体が主権であるように、意識の主体は理性である¹⁾。

資本・主権同様、理性もまた自己増殖する。すなわち理性はあらゆるものを批判的に考察・再考察したうえで、あらゆるものを自らのうちに取り込む。したがって理性を批判する動きをも自らのうちに取り込んでしまう。こうして理性が自己展開することによってあらゆる意識的産物を生みだすことになるし、理性が無限に自己増殖を繰り返すなかで意識領域には理性以外何もものも存在しないことが再確認されることになる。理性主義社会である。

理性は剰余記号たる真を産出するが、それを自らのうちに回収することによって、理性自体が真理を体現することになる。資本が富を体現し主権が正を体現するように、理性は真を体現する。ここから理性万能の発想が出る。

ところで感性を主観面から捉えたものが情念であり、客観面から捉えたものが想念であるが、いずれにせよ理性が感性化されると理念となる。理念についての学を理念学（イデオロギー）という。もっともこれは虚偽意識に転じる。理性が取り扱うからには結局すべてが真であると念じようとも、現実的にはそういうわけにはいかない。それではすべてが意識のなかに閉じ籠められてしまう。正を正とし、偽を偽として個別具体的に覚知していけばよいが、全知であると強弁すると偽を偽として弁別することができなくなり、かえって偽に偽を重ね、すべてが偽に浸潤されてしまうことにもなる。全知全能を自称するがゆえに、逆に、意識領野全体が偽に覆われてしまうことにもなる。理性の専制ゆえの全虚偽であり、偽の体系としてのイデオロギーという側面である。げに、イデオロギーほど恐ろしいものはない。そして共産主義イデオロギーこそは、イデオロギーの最たるものである。

共産主義イデオロギーとは、人間は理想社会を設計できるという認識形式に、生産手段の共有統制を基盤とし社会的諸形態を最大限共有統制しようという認識内容を盛り込んだものである。このうちまず内容上の問題から考えてみるに、共有ないし社会有とは私有に対立させた概念である。つまりは近代的私有に対立するものとしての共産主義社会ないし社会主義社会という構図である。だがこれでは近代を越え出る論理とはなっていない。近代と単に対峙した社会、近代を否定するにすぎない社会、である。だが、人類の地歴的展開関係としては実は逆で、人類は、〈社会の維持発展〉を第一義とする時代から〈個々の能力の全開〉を第一義とする時代へ、大きく移ってきたのであった。前代から近代へのこの進展は、内容的には、社会主義社会から個人主義社会への進展という謂いであった（なおここで言う「社会主義」とは語の正規使用の意味におけるもので、イデオロギー的な意味を含んでいない）。ここから、〈資本主

義社会から社会主義社会ないし共産主義社会への進展」という構図は、論理的に成り立たないことがわかる。社会主義ないし共産主義とは、前代のことであって、近代を含越するものではないのである²⁾

だが、この内容上の問題もさることながら、形式上の問題こそがより深刻な難点をなしている。共産主義イデオロギーは、人間理性が（可能性として）万能であるからして、それを最先端で十分に発揮することによって、理論界ではより正しき理論を構築することができるであろうし、現実界すなわち社会面ではより良き社会を構築することができる筈である、という発想に立脚している。この社会設計主義ないし社会改革主義、これは社会思想史上では社会契約論として初出したわけであるが、ともかく理想的な社会は人間の英知を結集することによって構築できるものであるとするこの見地こそは、人間主義（ヒューマニズム）の極致としての主知主義・知性主義・理性主義の産物であることを改めて確認しておかなければならない。

であるならば、「ちょこっとした改良よりも大胆な変革を！」「いやいやそんななまっちょろいことよりも全面的根本的な変革の方がよいに決まってるじゃないか!!」という、発想のエスカレートないし純化完成がみられることにもなる。論理は、突き詰めるにしくはないからである。こうして、人為により社会を抜本的に変革しなければいけないという知見、すなわち革命思想が登場することになった³⁾

2. 革命という発想のこわさ

共産主義イデオロギーが要請する最上の手段、それが革命行為である。革命とは、対象の全否定である。「新しい社会・文化を構築するためには、旧来のしがらみなんか拘泥してはいけなくて、そんなことをしては理想をパーフェクトに実現することなんかできやしない、旧来の社会・文化を弊履のごとく全面的根本的に捨て去り、一から構築するにしくはない」というわけである。これは前半過程たる破壊と後半過程たる構築からなるが、とりあえず問題

なのは破壊過程である。これを解放とも言う。ちゃぶ台を「うわあーっ!!」とひっくり返すようなかんじであろうか。だが真の問題は構築過程にこそある。極悪陰惨無比なものを作り上げてしまうことにならざるをえないからである。

まずこのような革命行為を、いったいだれがやるのだろうか。みんなで、と言っても、数千万、億単位でいる人々がいっせいに参画するわけにはいかないだろう。だいたい、みなが理知的であるわけがないし、そういうつもりもない。実際には意識的に先頭に立った極一握りの人々、すなわち前衛党に結集した職革、さらには党中央指導部、そして究極的には党書記長がすべてを独裁的に決定することになる。で、彼ら、彼は理性の塊であると推定しうるだろうか。まあ、そんな筈はない。私利私欲の徒にして野心の塊であろうからして、権力の亡者となり、独裁的な権力を振り回しつつ実はそれに振り回されて死体の山を築くことは目にみえている。だが最大の問題は、たとえ彼ら彼が理性の塊であったとしても、なお、それ自体が致命的な難点をなすことにある。

理性の、理性主義の恐ろしさは、ブレーキがないことにある。理性は批判能力を、自らの本質的な機能として、備えてはいる。批判とは、当然、自己批判も含む。そうやって理性は自己増殖しつつ自らに還帰する。だが実は何も変わっていないし、そこに理性と称するもの以外何も存在しない。理性による専制は、何ものにも遮られることなく、無際限に自動展開することになる。この理性による支配、古代人はこれを最大限好意的に哲人政治と呼んだが、その実、近代主義的には共産党独裁政治となる、ならざるをえない。

換言するならば、理性は自己以外の権威・秩序を認めない。(自己) 検証ができない。だから「俺が理性者だ! すなわち俺が党の独裁者だ!! 文句あつか?!」となった場合、誰も文句が言えなくなってしまう。では、なぜ党が理性的存在を自称できるのだろうか。理性者を自称するのはおこがましくて誰にでもできることではないし、普通の人ができることではない。ところが、表の世界では偽善すなわちきれいごとを声高に主張し、裏に回っては異論ある者を暴力

的に威嚇排除するような人が現れたときには、この人、このような人々を排除することは難しい。大衆は愚かであるから、一見もっともらしく、かつ実利も伴っているならば、支持してしまいがちである。支持を一回取り付ければ、彼らは全権を与えられたものとしてしまう。あとは彼らの専横的暴力があるのみである。人々が、あとから抵抗しようと思っても、取り消そうと思っても、変えようと思っても、それはもう決してできない。後の祭りである。

で、理性が革命を呼び寄せる。革命の、革命主義の恐ろしさは「目的のためには手段を選ばない」という独善的発想にある。「俺達がやろうとしていることは、やっていることは、真理だ！ 正義だ！ だから、それを実現するためならば、何をやってもいいんだっ!!」となる。目的は手段を浄化するというわけである。当然これはネガティヴな方向へと働く。「われわれは革命家だ！ だから何をやっても許されるんだ!!」という強弁から謀略虐殺等々といった事態までは、ほとんど必然的な因果経緯にある。中途半端に立ち止まった者は、踏み倒されざるをえない。左翼の病理の本質はここに存する。およそこのような命題を是とする党派・運動は、まず無条件に間違っていると断じなければならない。独善という恐怖、手段を問わないという発想の恐ろしさ、それは歯止めがなく歯止めを掛けられない、という点にある。

さて、ではこのような恐ろしい共産主義イデオロギーによる革命行為は、偶発的な出来事であったのだろうか。人物的犯罪ないし地歴民族的間違いか何かだったのだろうか。そういう面も大いにあるだろうが、それだけでは済まされない。論理必然的な経過でもあったことを理解せざるをえない。近代化は、多かれ少なかれ、前代を否定するかたちで立ち現われるほかなかった。たとえば17世紀のイギリスや19世紀のフランスをみれば理解しうるだろう。しかしとりわけ、そののちの超後発地域は、近代化に追い込まれ、多かれ少なかれ、意識主導型の近代化をせざるをえなかった。20世紀のロシア以降の諸国は、多かれ少なかれ、共産主義なり革命なりを、一般に左翼的指向性を、視野に入れるほかなかった。近代・近代化が、それを強いたのである。

左翼的指向性とは、西洋発近代の先端形態・極限形態にはかならない。共産主義イデオロギーとは、その最先端に位置する。西洋発近代の論理の極限形態としての共産主義イデオロギーである。これは理性主義の極北であり、論理必然的な、論理普遍的な思想である。しかも内容的には万人の平等を訴えるものであった。だからこそ、米英も含め、先進諸国の、まだ世情に疎いが正義感に燃える若きインテリ達こそは、かぶれざるをえなかったのである。彼らには、それが弱者の怨念であり逆恨みであることなど、そしてそのような観念的偽善的な美名のもとには権力という公的暴力を思う存分振り回さんと欲する凶悪な徒党が群れをなして集ってしまう機微など、わかつた筈もなかった。少数の観念的狂信的インテリが説く旗のもとに多数のごろつきが集い、独裁的な凶事を働く、しかもこの悲喜劇を、真・正を体現しているという美称ゆえに、解放幻想ゆえに、誰も止めることができない、これが理性（理念）によるテロルの実相であった⁴⁾。

20世紀のイデオロジズムは、理性から遠ざかったという点で間違ったのではない、逆に、理性が独善的に振る舞ったという点で間違ったのである。これは理性の爲した間違いと言うよりも、理性による完全究極の犯罪行為であり、さらに正確に言うならば理性そのものの罪なのである⁵⁾。

3. 自由主義・平等主義のこわさ

さて、1990年代以降の現代左翼（新々左翼、Pinkies）は、〈革命を起こし共産主義社会へ〉という展望を放棄し、代わりにただ無目的無責任な社会・文化大混迷をもくろみ活動している。

この点をレーニン後の20世紀左翼思想史上で捉え返すならば、その中心軸をなすフランクフルト学派を筆頭とする文化批判論は、既存の文化的総体、わけてもすべての徳目を非難し、没価値になることを積極的に促す。「既存の文化・既成の秩序・所与の価値等々の総体をすべてひっくりかえそう！」と彼らは扇動した。ジェンダー、カル・スタ、ポスト・コロなどといった流行をとっか

えひっかえ身にまといつつ、要するに秩序・規範を小馬鹿にし社会・文化の混迷を深めようというわけである。彼らに共通の戦略があるわけではない、ただただ「文化なんかぐちゃぐちゃになったって、別にいいじゃん」という勝手仕放題、あとは野となれ山となれという無責任性である。これを価値の多様化、価値相対主義などと言うが、これは無価値主義へ直結している。シニシズム、ペシミズム、ニヒリズム等々の世界である⁶⁾

さて、ここに端的に自由主義の完成形態がみてとれることに注意したい。もともと共産主義は自由主義と根本的に対立する、というのが一般的な通念であったろう。確かに、さきにもみたように、確かに社会主義（共産主義）と個人主義は対立する。そして自由とは、何よりも個々人の選択の自由であるからして、個人主義と自由主義は相即的である。だから社会主義（共産主義）と自由主義は対立する関係にあると言ってよい。だが他面において、左翼は近代の先端を行くからして、さらなる自由化を求める関係にある。権力奪取前の左翼は、つまりきれいごととしての左翼イデオロギーは、一般に、自由・自由主義と相即的でもあるのである。（左翼が自由主義と本当に対立するのは、権力奪取後のことである。）しかも現代左翼は、もはや目標を失っているからして、極めて無責任に、言いたい放題に、自由をアジルことができる。事は簡単で、人々に不平不満を大いに募らせればよい。不平不満の種は、強いて掘り起こそうとするならば、幾らでもある。それを性急かつ最大限に並べ立てて問題化し、声を大にして政権を突き上げる。人々の相対的な不遇感を無理矢理煽り立て、妬み嫉み僻みの劣情を最大限に膨らませ、政権を攻撃する。勝手仕放題、すなわち自由主義である。

人によっては「自由主義とはもっと崇高なものであって、こんな勝手仕放題とはわけが違うわ、混同しないでチョーダイ！」と憤慨するかもしれない。だが、そうだろうか。通例言われるように、自由には free from と free to がある。前者が抑制的具体的であるのに対し、後者は無限的抽象的である。前者自体無内容に賛美するわけにはいかないが、特に問題なのは後者である。そして自由

は、前者に留まらなければいけない理由はなく、後者まで自由に突き進んで差し支えない。と言うよりも、自由主義は必ず後者に至らざるをえない。だが、この free toこそは、無際限の自由という謂い、すなわち勝手仕放題なのである。これは(自由の過剰であり)価値・秩序の崩壊を必ず帰結せざるをえない。普通こまではやらないものであるが、なにしろ意図的に煽る側にとっては、配慮・遠慮・自制等々のプレーキなど一切無用のことである。

さて、実際にはこれに平等要求が絡む。庶民にとって、自由とは要求の抽象的な形式にすぎず、平等こそが要求の具体的な内容である。現代社会において、人々は無際限の平等ないし格差解消を、国家に、求めることになる。そう、現代左翼は、さきにも述べたように、一方で国家を唾棄しながら、他方で国家に無限の要求を突き付けあれもこれもそれも実現しろと迫るのである。この〈国家への否定的依存性〉こそは、現代左翼の国家論上における特徴である⁷⁾。

もっとも理想的には、自由こそが目的で平等(民主主義)は手段にすぎないのであるが、いざ民主主義社会になってみると、そうもいかない。民主主義は庶民にとってなかなか気分のいいものとなる。こうして自由も平等(格差是正)も、ということになり、さらには平等を自由に求める、というさきの構図になる。目的と手段が転倒するわけである。

こうして、遂に究極無際限にして無内容な自由主義&平等主義が姿を現した。「何をしようと私の勝手にしょ! それにしても国は何をボサーってしてるの、もっともっと私にいろいろとやってちょうだいよ!!」これは義務0%権利100%の世界である。自由平等要求の果てに、剥き出しの欲望を無際限に全開する局所刹那の快楽消費主義が立ち現れた。近代は、ここに完成をみたのである⁸⁾。

換言すれば、彼らこそ近代主義、すなわち〈現在主義的个人主義〉を全面的に体现した絶対的個々人である。彼らは誰憚ることなく無際限に欲望し、貪る。扇動者側からすれば「弱者救済」「差別・格差是正」「人権」「解放」等々

を訴えながら、衆愚にどこまでも迎合すればよいわけである。かくて衆愚が跋扈し、退嬰せる文化が満開となる。ここでは個々人がばらばらになっており、公共性は失われている。常識的な価値・規範・秩序などはガタガタになっており、犯罪が多発するようすさんだ世相を示している。概ねこれが、市民社会なるものの真相であろう⁹⁾。

実際、自由・平等要求の自制など、なかなか難しい。大衆に高度なことを求めるのは無理である。西洋で、なお社会文化がもっているのは、右翼(保守派)の努力もさることながら、多分にキリスト教による。宗教が下支えしてくれているわけである。だからこそ、啓蒙以降の近代的・左翼的諸思潮は、宗教否定を強調したのであろう。おそらく西洋・西亜のような社会文化で、一主教(一神教)を根絶したら、社会文化は崩落してしまうであろう。

ともあれ、人間の社会文化に、全き自由・平等などありえないし、そのようなものを追求すべきでもない。たとえば人を殺しまくり、女を犯しまくり、物を盗みまくる自由など、認められるわけがない。もちろん自由や平等は、ある程度は必要であり、重要でもある。特に、周知のように、平等よりは自由の方が大事であり、諸個人の選択の自由こそは最大限優先されなければならない。また結果の平等など夢想すべきではないが、機会の平等はある程度あった方がよい。しかし、それにしても、自由・平等は、無際限に追求すべきものではないのである¹⁰⁾。

ではどうしたらよいか。これらは近代と相即的であるからして、私達は近代から疑わなければならない。疑うと言っても、やり直しを要求するものではない、近代をなかつたことにしよう否定しよう、というものでもない。近代を、革命ではなく卒業していこう、越えていこうというものである。それが東洋発新代論である。

注

- 1) 社会科学論については〔拙著、平成10年〕第三章等を参照されたい。

- 2) 人類の地歴的展開については〔拙著、平成17年〕を参照されたい。
- 3) 修正主義は教条主義になぜ理論的には負けるのか、社会党は共産党になぜ引け目を感じ一步譲らざるをえないのか、それは論理展開上において、途中で迷い留まる者と最後まで突き進む者との差である。
- 4) たとえば1936~38年にモスクワ公開裁判が開かれ、「ファシストの手先」と決め付けられたジノヴィエフ、カーメネフ、ピヤタコフ、ラデック、ブハーリン、ルイコフら大物の被告達は、みな、その通りだと「自白」した。根も葉もない嘘を、自ら進んで認めたわけである。一体これはどうしたことだろうか。恐怖・絶望・諦念等に促されてであろうとはいえ、おそらく彼ら（の一部）はなお、共産主義の「大義」の前にはこの（小さな）誤りも黙認するほかない、と判断したのではないか。Honey Trapならぬ Hypocrisy Trapである。それほどまでに、共産主義イデオロギーは恐ろしいのである。
- 5) なお、一般に理性の限界を論じたものとして、たとえば〔高橋昌一郎〕を参照されたい。
- 6) たとえば〔田中英道〕は、G.ルカーチ、A.グラムシを先駆とし、M.ホルクハイマー、T.アドルノ、H.マルクーゼ、J.ハーバーマスらを中心とするフランクフルト学派系の文化批判理論が、現代左翼思想の中心軸を為している、とする。だが戦後、フランクフルト学派系に留まらず、また独みに限らず、仏英等においても、各種の左翼的な文化等一切合財批判論が花盛りである。現代思想界の主流は、ともかく絶対的相対主義、規範否定、無秩序礼賛、勝手仕放題等々を、難解に、ないしもつもらしく説いている。
- 7) ちなみに、ここで国家の本来的な機能を簡潔に説いておきたい。それは、空間軸上においては国防と治安、時間軸上において国家祭祀と教育にある。国家の四大機能である。わが国の場合には、以上に加えて、まず第一に、皇統護持がある。都合、五大機能である。あとはできるだけ最低限の機能あるのみ、できるだけ不介入としたい。安全保障は必要十分に、社会保障は最小限に、というわけである。理想は〈強く小さい国家〉である。
- 8) たとえば〔Habermas J.〕は、近代はまだ未完成のプロジェクトであると言う。何を言うか。近代の論理は既に完成しているのであり、すべて提示し尽くされているのである。
- 9) もちろん、いわゆる市民社会論者は、逆に、麗しい社会像をさまざまに描き出すであろう。だが、市民社会を構成するのは、絶対的個人主義者の筈であり、だとすればその集合体は、真に砂のような状況、すなわち本文で示したような陰惨異様な状況になるほかない。たとえば、同性愛婚が正常婚と同権化される一方で「子供など邪魔くさい！ 糞くらえ!!」となりつつあるのも、その一端である。
- ちなみに、このピンク色の絶対的個人主義は、アメリカにおけるリバータリアンなどとは異なる。後者は自己責任を旨とするが、前者は〈国家依存・自己無責任〉を旨とする。なおリバータリアンについては、たとえば〔副島隆彦〕を参照されたい。
- 10) ちなみに、たとえば〔渡部昇一〕によれば、個々人の選択の自由の意義を強調したF.ハイエクこそ、随一のマルクス主義批判であるという、参照されたい。

IV 東洋発新代とは何か

左翼的指向性をいかに乗り越えるか、これが問題である。この問題を考える際のポイントは、左翼的指向性とは近代的指向性にほかならない、という点をしっかりと理解することにある。左翼運動とは、一方で近代を批判し否定しつつ、他方で近代の最先端として近代化を急進させようとする、〈自己否定的近代化〉の運動であった。で、とりあえず後半部分に着目するならば、左翼とは近代のフロントであった。近代の最先端の翼、〈先翼〉である。だから、近代の枠内に留まる限り、左翼の「大義」を越え出ることはいできない。

この点で、右翼的指向性を対置してみても、やはりうまくいかない。進歩・改革指向に対する保守指向は、そのままではやはりアンチテーゼにすぎない。またその変形、すなわち初めから、保守するための改革ならOK、とばかりに改革的保守・左翼の右翼を自称する説にも、にわかには肯んじにくい。一体どういう点において保守しどういう点において改革しようというのか、原理原則をはっきりさせておかないと、無原則になってしまうのではないだろうか。近代を、近代的な思考を、否定するのではなく、いかに乗り越えるか、〈近代との対決〉〈近代の超克〉論が、やはり必要なのである。この点に関し、人類の地歴的展開の考察を踏まえて提出したものが、東洋発新代論である¹⁾

1. 近代化の終了期

新代とは何だろうか。新代とは、決して近代を否定するものではない。近代の意義・成果を最大限受容しつつ、近代の限界・難点にも思いを巡らせ、近代を総体的に乗り越えていこうとするものである。

左翼はあくまでも対立図式でものごとを考えていく。前代を否定した近代を革命によって再度全否定し、更地から共産主義社会を組み立てようとした。この〈完全破壊・更地再建〉図式は、西洋・西亜・大陸等には不可避不可欠な思考行動様式であるかもしれないが、われわれには基本的に縁のないものであ

る。むしろそうでない思考行動様式を積極的に練り上げ、世界へ輸出していくべきであろう。

まず近代化に関して言うならば、ソ連崩壊とともに、近代化の展開期は終了し、近代化は既に終了期に入った。これに伴って、歴史の最先端を切り開いているつもり左翼は、実は時代に追い越されてしまい、歴史的現実によってピリオドを打たれてしまった。にもかかわらず、なお生き残らんと足掻くがために、無目的に漂流しながら、無責任な災厄を垂れ流し、社会文化に一層の混乱をもたらしているのであった。この状態を卒業するためには、新たに時代を切り拓く必要がある。

つぎに自由等に関して言うならば、近代の目標は、少なくとも先進国・先進的社会においては、すでに達成された。〈豊富性・民主性・自由性〉の果実をみてみよう、もう十分ではないだろうか。これ以上どこまでも飽くことなく追い求めるならば、それは過剰というものである。〈過近代化〉である。〈豊富主義・民主主義・自由主義〉を内実とする近代主義の害悪が眼前でさまざまに繰り広げられているのではないか。いわく、物が溢れていてもなおかつこれでもかこれでもかとばかり売り込み買いまくらざるをえないさま、飽くなき平等・実利を求めて醜く罵り合い手を差し出し足を引っ張り合うさま、社会的な常識や徳目などそっちのけでみな自分勝手に放縦仕放題のさま等々、諸々の悲喜劇が生じている次第である。この状態を卒業するためには、やはり自制心が必要となる。

それには、人間・人間の能力・人間の理性には限度があることを改めて理解しておくことが、出発点でなければならない。近代の啓蒙的理性を、さらには古代来の西洋的理性からして、疑わなければならない。感性と知性を統御するもの、それは頭脳に発する理性ではなく肚腸に発する意志である。東洋発新代においては、肺心胸に発する感情や脳頭に発する知性をそれぞれ重視しつつも、それらを統括するものとして肚腸に発する意志を最重要視することになる。責任・義務等も、この点につながってこよう。

以上に対して、そもそも未来を論じようとする姿勢こそが左翼の発想であ

り、傲慢不遜である、とする反論があるかもしれない。これに対しては、こう答えておこう。過去を振り返り過去を重視するのが前代的な発想であり、現在に固着し現在しか見ないのが近代的な発想であった。これらに対して、過去を振り返り現在に着目しつつも、可能な限りにおいて、未来にまで視野を投げかけ未来からの声にも耳をすませようとするのが新代的な発想である、と。

2. 日本の国柄

では、東洋とは何だろうか。その典型はどこだろうか。東洋の典型、それは〈極東洋にして新東洋〉である真東洋日本である。日本こそが人類史の第三段階を切り拓いていく関係にある³⁾

さて、その日本であるが、現在は極度の混迷状態に陥ってしまっている。これは人類史的な試練であり、何としても踏ん張らなければならない分岐点・勘所である。さなくば人類史は悪無限に突き進んでしまうことになるからである。そうするわけにはいかない。国内外の自虐反日妄動を徹底的に叩き潰さなければならない。

わが国は、戦後完全にわれを失ってしまったが、そもそも明治来、半ばわれを失っている。明治から問い直さなければならない。まずは人心を建て直し、民族意識を取り戻し、正氣となり、国権・人義(人間の義務)を重視し、民族・国家に対する忠誠心を改めて確立しよう。わが国は皇統を戴く民族柄であり、皇統立憲制の国柄であることをしっかりと理解しておこう。温故知新である。そしてそこから道義・道理を世界に訴えよう。日本が未来を拓くのである⁴⁾

注

1) 実は、左右翼は、それほど異ならない。同根ゆえの表裏一体性がある。たとえば米ソの類似性なり、占領期日本での米占領軍の自陣営内左翼との蜜月関係なりを想起してほしい。

なお近代との対決を論じたものとして、たとえば[千石好郎]がある、参照されたい。

2) 意識主導型の近代化論については、[拙著、平成10年]第四章を参照されたい。関連し

て [Wallerstein I, 邦訳 162 頁] [今村仁司, 184 頁] なども参照されたい。

- 3) ちなみに、人類史の第一段階とは、南洋発前代のことである。これは、およそ1万年以上前の、〈移動採集狩猟・部族・集団想念〉を特徴とする社会主義社会である。社会主義の本来の意味は、さきにもふれたように、このようなものである。ここでは社会の存続発展が第一義であって、諸個人の自己実現などは第二義であるにすぎない。
- 4) たとえば、うちの近くには「共和」小という名の小学校がある。一体何を考えているのだろうか。わが国には共和政など無縁の代物である。ただちに校名の変更をしてもらいたいものである。

なお総合的地歴観については再び [拙著, 平成 17 年] を参照されたい。また日本論 (国道論) および東洋発新代論について、詳しくは別の機会に検討したい。

お わ り に

左翼イデオロギーは、近代性をその最先端で体現している。だから近代内に留まり続ける限り、それは一向になくならない。

左翼を乗り越えるためにも、ないし左右翼の対立を打開するためにも、東洋発新代へと時空的論理を進展させなければならない。

左翼よさらば、左翼 (両翼) は近代化・近代の終焉とともに、終焉するであろう¹⁾

注

1) 最後に再び私事で恐縮であるが、私の最終的な改心 (回心) は、大学から大学院に進む春に、M.スピリドーノヴァ、A.バラバーノフ、A.シリガ、R.メドヴェーデフ等々を読んでいたように思う。それは衝撃的な読書体験であった。

しかしながら私のなかではなお一貫しているものがある。それは、近代的なシステムはやはりおかしい、逆立ちしている、という感覚である。西洋発近代として、それを人類の地歴的展開のなかに位置づけえたときに、ようやく私の感覚は、とりあえず穏やかに所をえたように思う。

もっともそれは理論界における話であって、現実界においては、未だに所をえていない。核武装・国軍正常化、皇統拡充・華族復活、教育・マスコミ界正常化、治安強化・厳罰化、国家祭祀正常化・神道国教化等々が実現されなければ、わが心はとても安住できない。わが魂には未だ居所がない。現実を正せるまでは、わが心は、歴史小説の読書等にも逃避するほかない。人々がこの現在の日本社会にあって、言いたい放題を言いやりたい

放題をやりながら、卑近な世界のみをおもしろおかしく暮らしていけるのが、私には驚きである。TVを見ても（うちはTVを見ないが）選挙結果を見ても、ついでに学界をみても、嘆かわしい限りである。世論が万能ではない。世論が、国民が、そして学界が、間違っているのである。

【主な参考文献・サイト一覧】

- 浅羽通明 『右翼と左翼』幻冬舎，平成18年
- 今村仁司 『近代性の構造』，講談社，平成6年
- 杉山徹宗 『侵略と戦慄 中国4000年の真実』祥伝社，平成11年
- 千石好郎 『「近代」との対決』法律文化社，平成11年
- 副島隆彦 『現代アメリカ政治思想の大研究』筑摩書房，平成7年
- 高橋昌一郎 『理性の限界』講談社，平成20年
- 田中英道 「日本のメディアを支配する“隠れマルクス主義” フランクフルト学派とは」『正論』平成15年8月号
- 福井義高 「東京裁判史観を痛打する「ヴェノナ」のインパクト」『正論』平成18年5月号
- 松崎 昇 『西洋発近代の論理』社会評論社，平成10年
- 同 『日本が未来を拓く』文芸社，平成11年
- 同 『西洋発近代からの卒業』慧文社，平成17年
- 若狭和朋 『続・日本人が知ってはならない歴史』朱鳥社，平成19年
- 渡部昇一 『自由をいかに守るか』PHP 研究所，平成19年（原初出：平成11年）
- Buchanan, P., *The Death of the West*, 2002（宮崎哲弥監訳『病むアメリカ，滅びゆく西洋』成甲書房，平成14年）
- Coulter, A., *Treason*, 2003（栗原百代訳『リベラルたちの背信』草思社，平成16年）
- Courtois, S., et al., *Le Livre Noir du Communisme*, 1997（外川継男ほか訳『共産主義黒書』全2冊，恵雅堂出版，平成13，18年）
- Habermas, J., 'Die Moderne –ein unvollendetes Projekt', in *Kleine politische Schriften I–IV*, 1981（三島憲一編訳『近代 未完のプロジェクト』岩波書店，平成12年，所収）
- Matsuzaki, N., 'Japan also must Possess Nuclear Missiles' 『上武大学経営情報学部紀要』第30号，平成19年10月
- Rummel, R., *Death by Government*, 1994 <http://www.hawaii.edu/powerkills/NOTE1.HTM#FIG>
- Wallerstein, I., *After Liberalism*, 1995（松岡利道訳『アフター・リベラリズム』藤原書店，平成9年）

NSA <http://www.nsa.gov>

Washington Post <http://www.washpost.com/index.shtml>